

## イグアノドン復元の話

七つ森案内人；伊藤 裕一

1821年ごろ（採集者は夫人とも使用人とも言われているが……真相は不明），イギリスで，こんなものが見つかりました。さて，何でしょう？

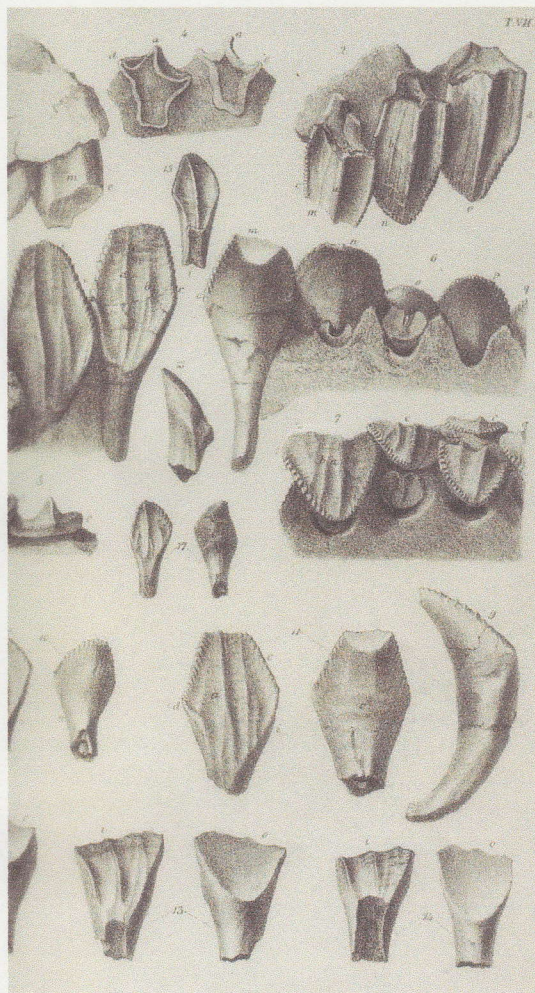


オックスフォード大学のウィリアム・バックランド先生は，魚の歯。フランスのジョルジュ・キュビエ先生（比較解剖学）は，サイの歯。その後，イデオン・マンテルは多くの学者に手紙を出しますが……。同時に，化石採集。たくさんの歯や骨を採集。

ところで，こんなものも採集しました。



これは，何でしょう？

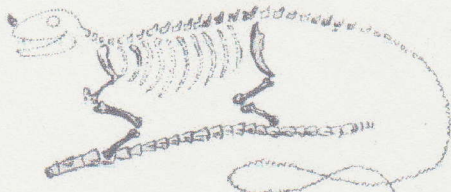


マンテルは，これを角ではないかと考えました。

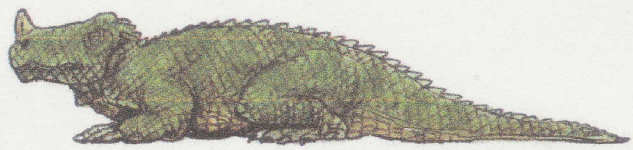
しかし，歯に関しては納得のいく動物には行き着いていませんでした。

そこで、動物標本のたくさんある  
ハンテリアン博物館（ウィリアム・クリフト館長）を訪問。  
サミュエル・スタッチベリが運搬している標本の歯と似ていることを発見（本当？）。  
その動物の名が、イグアナでした。

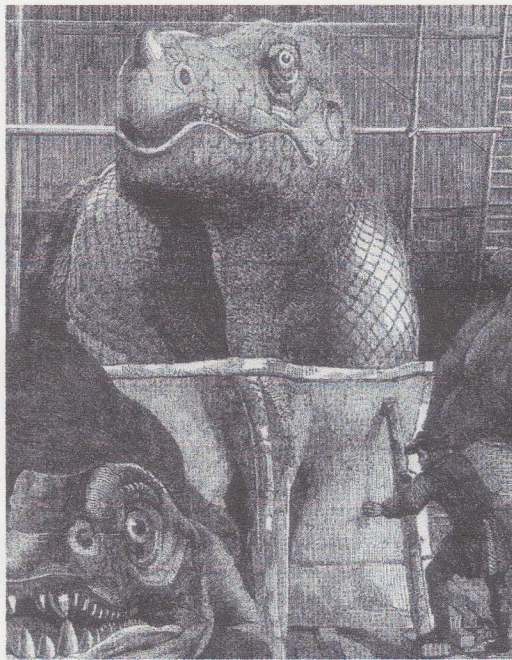
こうして、1825年、イグアノドン（イグアナの歯 *Iguanodon Mantelli* OWEN）と命名、  
巨大生物として学会に発表することができました。



(a) マンテル(1834-38)



▲19世紀中ごろのイグアノドンの復元。大きな  
トカゲとして復元され、手のツメは鼻の上の  
角として復元されている。



製造中のイグアノドンの模型

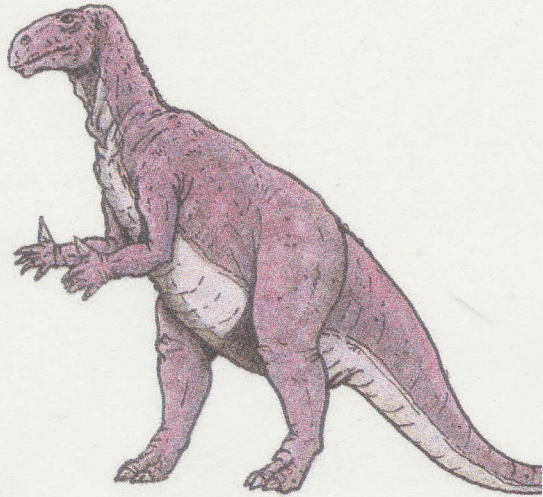


クリスタルパレスのイグアノドン

1878年、ベルギー王国ベルニッサールのサンバルベ炭坑で、  
イグアノドン約40体分の化石が発見されました。  
土木技師だったルイ・ドローは、ブリュッセル王立自然史博物館で、  
イグアノドンの研究を行いました。

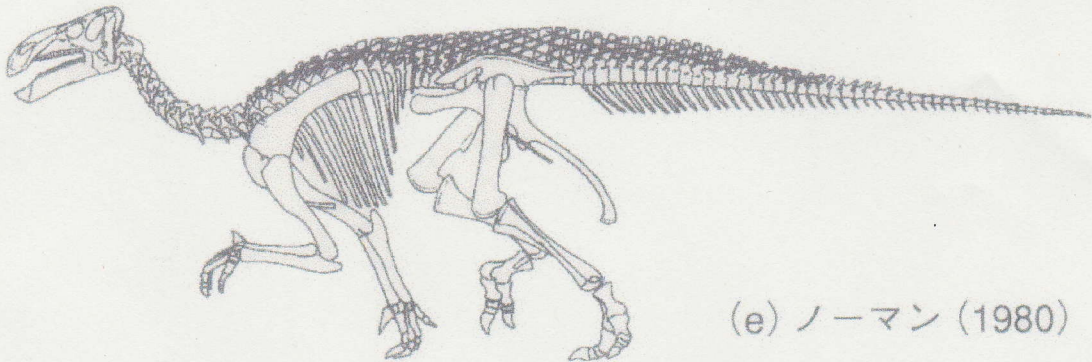


(b) ドロー (1882)



その結果、イグアノドンは二足歩行（三脚立ち）で、  
角のような骨は、親指の突起（防護武器）と考えるようになりました。

そして、100年を経過した頃、



(e) ノーマン (1980)



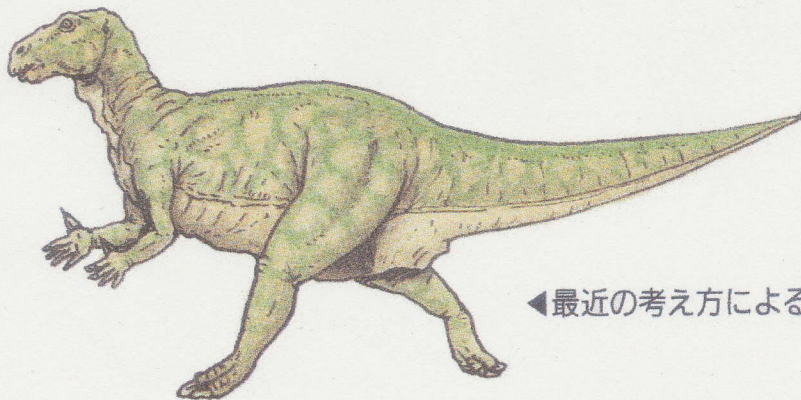
イギリスの古生物研究者デビッド・ノーマンが、  
1980年、四足歩行（蹄行性・二足走行）の骨格図を発表。それはどうして？

- ①ドローの骨格図では尻尾を地面につけての三脚立ち。これではバランスがとれない。
- ②恐竜の足跡化石の発見が多くなるが、尻尾の跡が見つかっていない。
- ③原位置（発掘された時）のスケッチでは、尻尾がまっすぐかやや下に曲がっていた。

イグアノドン<sup>あしあと</sup>は足跡も世界中から見つか  
っている。親子など大きさのちがうイグ  
アノドン<sup>いっしょ</sup>が一緒に行動していたようだ。  
前肢<sup>ぜんし</sup>の親指はスパイク状<sup>すいけい</sup>になっていて、

武器<sup>ぶき</sup>になっている。体が大きかったので、  
4本の脚<sup>あし</sup>で歩いた。命名はイグアナの歯  
という意味。

イグアノドンの頭骨<sup>とうこつ</sup> 左側面<sup>さくわめん</sup>（発掘状態）



◀最近の考え方によるイグアノドンの復元

ヒサ クニヒコ (1993) 恐竜物語  
犬塚 則久 (1997) 恐竜復元  
真鍋 真 (2005) 人間と恐竜との出会い

角川書店  
科学ライブラリー57 岩波書店  
恐竜博 2005 朝日新聞社事業本部